

2024年10月20日 青戸教会 「天に市民権を持つ者」

高橋克樹牧師

聖書 エレミヤ書29章1、4〜14節、ヨハネ福音書17章13〜26節

本日は召天者記念礼拝です。青戸教会で信仰生活をされて天に帰られた方、さらには青戸教会に関わる教会員、求道者の親族で天に召された方を礼拝の中で想起して、私たちが導かれている神によってそれらの一人ひとりが天にあって、神の祝福を受けておられることを祈念する礼拝です。信仰をもって天に帰られた方が神によって永遠の命を与えられていることは間違いのないことですが、生前にご本人が信仰に導かれていなかったとしても、その方々によって、この世にある生を受けることができた者たちは、この命を与えられたことによって、イエス・キリストの父なる神に生かされて歩む人生を与えられてきたのですから、私たちは、今は天にあるその方々を神に対して執り成す役目があるのです。そういう意味で、召天者記念礼拝では、信仰者でない方々のことも想起しながら、神の私たち人間に対する憐れみ深い愛に故人を委ねる礼拝をささげるのです。

神はすべての人に対して、十分に、無条件に惜しみなく、その愛を与えてくださったのです。そして、それは召されたのちも変わらず、変わらずに注がれているのです。確かに、生きていくときに主イエス・キリストを信じて、信仰を抱くことは、神の愛に対する応答として、最も喜ばしいことですが、たとえ信仰に至らずに天に召されたとしても、地上で信仰を抱いている私たちの執り成しによって天において、神の愛に十分に浴することができるので、御子イエスをこの世にお遣わしになることで、この世に対する愛を示された神は、イエスを十字架の死より、蘇らせたことで、その愛の力が死をも超えるものであることを示されました。神の愛はすべての限界を超えて、この世と天の境界線をも超えて、生きている人、召されている人の区別なく、その愛を全うしてくださいます。

さて、説教題の「市民権」と言う言葉は聖書の翻訳には出てきません。フィリピの信徒への手紙3章20節に「しかし、わたしたちの本国は天にあります」とありますが、この「本国」と訳されているのが、本来ギリシア語で「市民権がある場所」という意味で、英語訳聖書ではcitizenship＝市民権と訳しているのです。ローマ帝国が支配していた時代においては、ローマ市民権を持つていることは、特別の権利を持つていることになったので、このような表現が聖書の中にも反映されたのです。つまり、キリスト教の信仰においては、天にあってローマ帝国の市民権のような絶対的な地位を持つことになるパウロは言いたかったのでしょうか。いかにもローマの市民権を持っていたパウロらしい表現です。

パウロが言うように、私たちの本国は天にあります。そのことはヨハネ福音書17章13節以下で語っているイエスの言葉によっても確認できます。14節後半で『わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです』と語っています。16節でも同じ表現が繰り返されています。イエスも私たちも本来はこの世に属していないというのです。それは、天に市民権を持っているように、天において私たちは皆神の愛に捕らわれているからです。ここでの「彼ら」とは、この世の人々のことです。さらには、23節では、神がイエスを愛しておられたように、神が彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになると思います。いずれはイエスによって、神がこの世の人々を愛しておられることがわかるときが

来るのですが、残念ながら、すべての人が神の福音に触れて神の愛に生かされている喜びを体感することになるわけではないのです。

天国に市民権を持っているということは、それは唯一の神の愛に生かされた存在として死後も神に生かされた存在としてあり続けるということです。神に生かされた存在としてあり続けるということが、永遠の命を持つということなのです。ヨハネ福音書でも、21節で『父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください』と言って、神がイエスの内におられ、イエスが神の内におられるように、すべての人を一つにしてくださいとイエスは祈っています。つまり、これは、神とイエスがおられる場所にすべての人を一つにあわせてくださいとイエスは祈っておられるのです。この場所はイエスも昇天して天の神の許におられる場所に、すべての人を招いておられることを指しているのです。イエスの執り成しの祈りがあって、私たちも同じように執り成しの祈りを神にささげることができません。私たちは召天者記念礼拝において、神の許に召されたお一人お一人を神に委ねて、神の愛の御腕の中で憩うようにと、愛する故人を執り成すことで、神の愛の祝福の中に置くことができるのです。

22節で『彼らが完全に一つになるためです』と書いているように、すべての人が神の愛と完全に一つとなって永遠の命に生かされるようになるために、イエスも祈っておられたのです。私たち人間は、この世において弱く、欠けのある者たちです。ですから、神の慈愛に満ちた愛によって救われなければ、ただ生きていただけの存在として寿命が来た時点で無に帰するような存在です。けれども、イエスが天の父なる神に、執り成しを通して神の愛式ふさわしい存在として受け入れてくださるように祈っておられたのです。そのことをヨハネ福音書は私たちに伝えていきます。

私たちが人間の知恵は真実なものを捉えることに遅く、真理に目覚めることが難しいものです。うたかたの日々を過ごしてしまいがちです。目先に事柄に目を奪われて、真実なるものに気を配ることさえままならず、勢い、自分の思いによって他人を平気で傷つけてしまうような愚かさを持っています。けれども、御子イエスが神に執り成してくださいるように、神と完全に一つになるように導いておられるのです。そのイエスに信頼を寄せ、歩んでいくしか、道はないのです。

新共同訳聖書は、天国と言う表現を採用していません。天国と表記すると、仏教的な意味での天国と地獄という連想が生まれてくるからです。福音書では端的に「天の国」と表現しています。国と訳されたバシレイアと言うギリシア語は、「主権」「支配」「統治」を意味する言葉で、神の愛が主権を握っている場所、神の愛が統治している場所という意味です。神の愛が主権を持っている場所にイエスもおられ、召された者たちもいるのです。ですから、天に市民権を持つ者と言う表現は、神の愛が主権を握っている場所に、召された者たちが一堂に会しているのです。そのような場所に、すべてのものが招かれているのです。私たちがこの世にあって、信仰を抱かずに召された人を神に執り成すことを通して、私たちの信仰の歩みもまた強められていることを覚えて、今は亡きお一人お一人を神に委ねる祈りをさげたいと思います。